

大名華族の生活

井 正 弘
宇 野 茂 樹

谷岡一郎学長 本日は遠いところ、ようこそ大阪商業大学公開講座

にお越し頂きまして、まことにありがとうございます。本日はお年を召されながら大変お元気な、旧彦根藩主井伊家の井伊正弘様においていただきまして、「大名華族の生活」という演題にて、いろいろと座談対話形式でお話しをしていただくことになりました。この会を主催しておりますのは大阪商業大学でございますけれども、特に共催をいただきました東大阪市、八尾市、柏原市の教育委員会関係者の方々に心より御礼申し上げます。今後とも大阪商業大学ではなるべく皆様に施設を開放し、またこのような機会をどんどん設け、その度に声を掛けさせていただく所存でございます。今後ともよろしくお願いいたします。はなはだ簡単ではございますが、大阪商業大学学長として皆様に一言御礼の挨拶とさせていただきます。本日はどうもありがとうございます。

うございます。

司会 それでは対談に先立ちまして、簡単にご紹介させていただきます。もうすでに皆様方のお手元に、パンフレットが届いていると思います。その中に今日対談していただきます、井伊正弘先生と宇野茂樹先生の略歴が書かれておりますが、簡単に紹介させていただきます。井伊正弘先生は明治四三年に東京に生まれられ、現在はもう八八歳でございます。学習院の中等、高等部を卒業され、昭和九年に東京大学農学部を卒業されておられます。その当時、主だった研究として、農業害虫をテーマにして研究を続けておられました。その後北里研究所の研究嘱託員あるいは農林省農業技術研究技官、農林省の農業改良局の研究企画官をご歴任されました。

昭和二六年、退官後は井伊家に伝来した膨大な美術工芸品、古文書



公開講座風景 向って右 井伊先生・左 宇野先生



井伊正弘先生

などの歴史資料の保存整理と、それから直弼公ゆかりの井伊家歴代藩主のご研究に当たられ、昭和三〇年には井伊美術館を設置し、館長にご就任されました。それから昭和六二年、彦根市が市政五〇周年記念事業として、設立開館した彦根城博物館の初代館長にもご就任され、今日に至っております。著書は『わが感懐をく井伊家の歴史と幼児の思い出など』を出版されておられます。この本は彦根城博物館の方に問い合わせされますとお求めになれます。

対談者の宇野茂樹先生ですが、大正一〇年滋賀県に生まれられ、昭和一九年に国学院大学卒業後、滋賀県立琵琶湖文化館の学芸員、滋賀大学学芸学部講師から滋賀県立短期大学教授、その後大阪商業大学の



宇野 茂 樹 先生

とになりまして、その時に団長を仰せつかり、調査団を組織して、井伊家へは再々お邪魔をする機会がございました。そのようなことから今日お話を願う井伊さんと非常に昵懇なお付き合いを賜り、今日は井伊さんいろいろなところ、大名家出身の

教授になられ、大阪商業大学商業史研究所の初代所長に就任されました。勿論文学博士の学位を取得されています。現在は滋賀県立短期大学名誉教授、滋賀県立栗東歴史民族博物館の館長であります。平成八年五月には勲三等瑞宝賞を受賞。著書は下に書いてありますように『近江造像銘』『近江路の彫像』『日本の仏像と仏師たち』と多数書いておられます。それでは井伊先生、宇野先生よろしくお願いいたします。

井伊 皆さんこんにちは。私は彦根の彦根城博物館の館長をしております井伊と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

宇野 紹介されました宇野でございます。今日は井伊さんのお話の聞き出し役、こういう意味合いで同席をさせていただきました。実は私、若い頃に、井伊家の什宝調査というのを、文化庁の仕事でやるこ

華族生活ということのお話を承りたいと思っております。

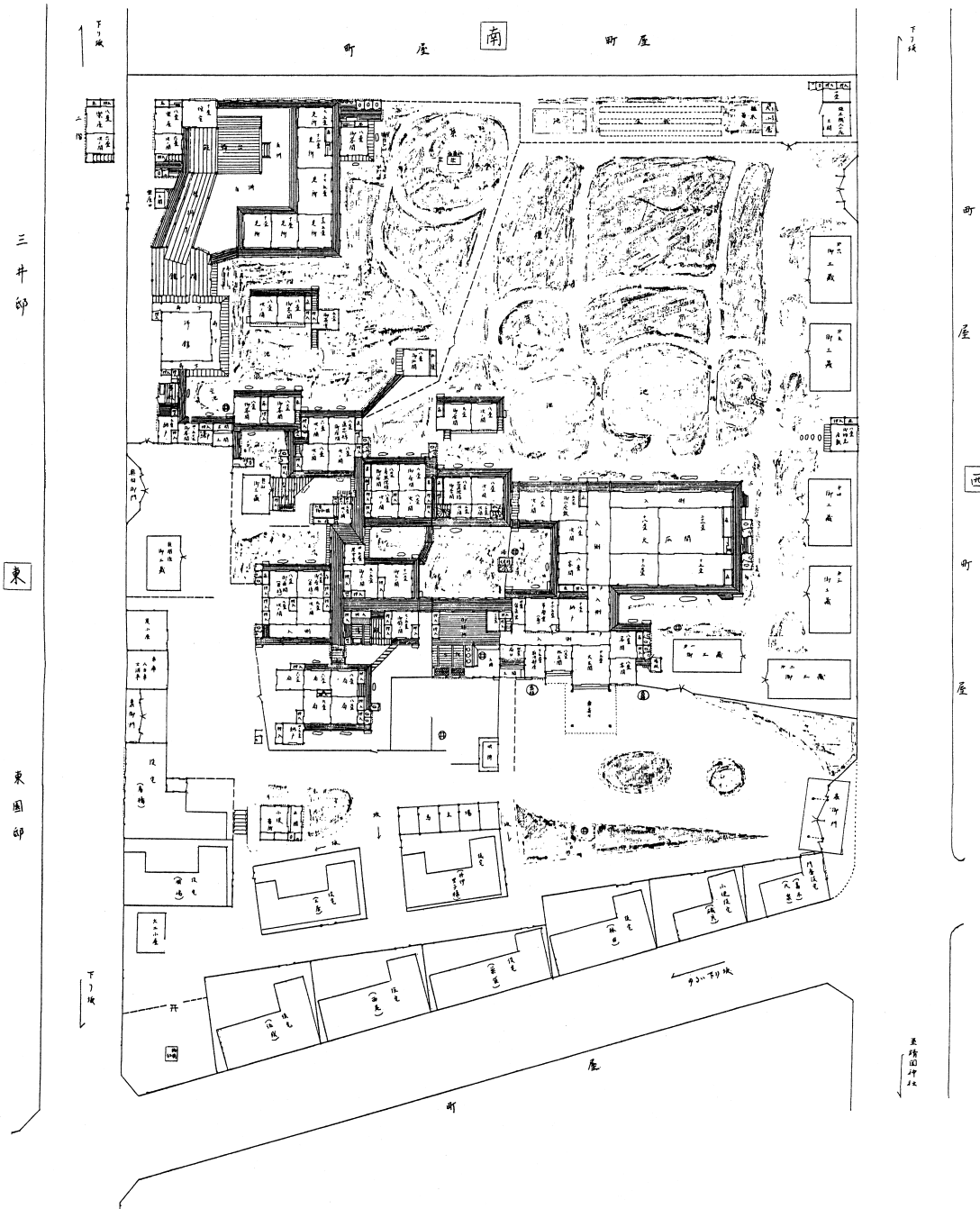
実は先ほど紹介がございましたように、井伊正弘さんは『わが感懐をく井伊家の歴史と幼児の思い出など』という書物を出版されておられます。この中にいろいろと井伊家のことであるとか、また井伊さんが幼い頃からずっと過ごしてこられた思い出を書いておられます。そのようなことで私はそれを拝読いたしました、非常に私達が知らない世界というものがあつたんだなと、そんなことを思ったわけです。

そのようなことで、この大阪商業大学公開講座で、今回こういうものを取り上げてみたいとお話がございます。井伊さんにお話し申し上げます。対談形式だったら話を承ろうと、こういう話でございました。そのようなことで話の聞き出し役ということで同席をさせていただきます。よろしく申し上げます。

では井伊さん、これからいろいろと約八〇分ばかりお話を承りたいと思うのですが、まず最初に伯爵家でありました井伊家の東京屋敷の構えと、それから構成というようなものを、江戸時代の幕藩体制の、井伊家の屋敷から掘り起こしてお話を願いたいと思いますが、よろしくお願いいたします。

井伊家の東京屋敷

井伊 昔の大名は、みな原則として江戸に住んで、一年おきぐらいにお暇をもらって国へ帰るといふ、参勤交代という制度がありました。ところが私の家は、幕府の非常に重要な役目をやっていたのですか



京都市題町區一番町 (現) 東京都千代田區三番町
井伊家本郎平面圖
 (大正十二年九月一日 関東大震火災により、焼失)

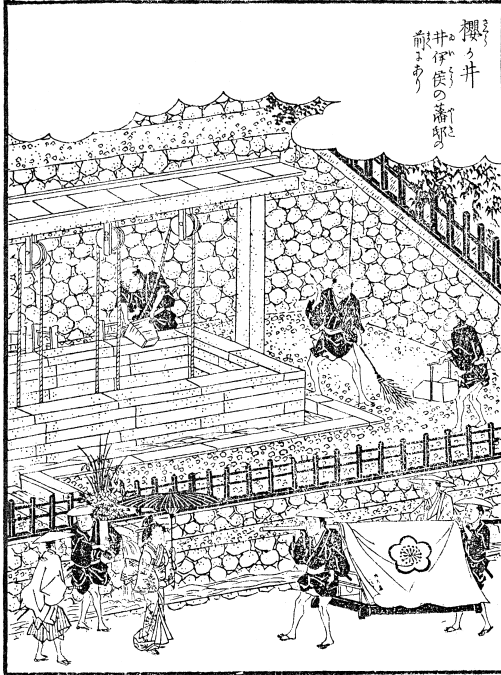
三井邸

東

東園邸

町屋

東園邸跡



桜が井 井伊侯の藩邸の前にあり。
 (『江戸名所図絵』巻之三、筑摩書房)

ら、幕府の中で老中の上座に座る溜間詰大名というのがありまして、これはいたいみな一〇万石以上の大大名で、その筆頭が井伊家でありまして、その他に会津の松平、それから高松の松平と、この三家が上溜って言って、必ず藩主になった場合には溜間詰になるということになっておりまして、その他に飛溜と申して、姫路の酒井であるとか、あるいは奥州の松平、あるいは松山の松平とか、桑名の松平、そういうのが飛溜で、一年おきに溜間詰になって勤めることになっておりまして。

それからまた溜間詰格というのがありまして、それは、幕末の頃には小浜の酒井、それから佐倉の堀田と、この二軒が、溜間詰大名とい

うことになっており、これは老中よりも上に座って、將軍さんに直接意見が言えるし、また老中の諮問に応じるといって、そういう性格があったので、その当時、溜間詰大名のうちの筆頭の井伊とそれから会津の松平とは藩主だけでなしに、その嫡男も必ず同時に溜間詰に出勤することになっておりまして、親子が揃って溜間詰に出るといって、そういう格式を持っておりまして。

江戸の屋敷は、小さな大名は上屋敷と下屋敷だけだと思いますが、それが大きな大名になりますと三つあり、上屋敷、中屋敷、下屋敷と、それが大きくなって、その他にもう一つ蔵屋敷といふのと、都合四つの屋敷を持つてゐるわけです。井伊家は、上屋敷といふのが、桜田門事変が起こった桜田門のすぐそばの、終戦前は陸軍の参謀本部があった、今はなんか県政記念館とかいふのになつてゐる所で、あの辺りが上屋敷でして、それから中屋敷といふのは、麴町の紀尾井町という、紀尾井町といふのは、紀州と尾張と井伊とがいたから紀尾井町といふ名前になつたのですが、今はホテルニューオータニになつてゐる所です。

それから下屋敷といふのは、代々木のいまNHKのある所から明治神宮と、それから代々木公園を全部含めた二三方坪ほどの大きな場所が、下屋敷といふのになつておりました。蔵屋敷といふのは、隅田川のそばにありまして、それはただ船でいろいろ米やなんかを運んで来て、貯蔵しておく屋敷でありました。そういう四つの屋敷を持つておりましたが、明治になりまして、全部明治政府からその屋敷を取り上

げられまして、その代わり麴町の靖国神社のそばに、約三〇〇〇坪の旗本屋敷がたくさんあった所、一五、六軒あった旗本屋敷を全部つぶして、それをひとまとめにして、そこに井伊家の本宅を政府からいただいた、そこに住むことになったわけです。

その屋敷は、明治の初めに建てた家ですから、昔の大名の屋敷とは全然違うわけで、昔の大名の屋敷というのは、上屋敷とか中屋敷というの、みないわゆる長屋というのがずっと回りを囲んでおりまして、その長屋に、彦根から出てきた、江戸で勤務する侍達がみなそこに寝泊りした長屋が付いており、下屋敷にはそれは無いのですが、そういう屋敷だったのです。私の麴町に生まれた屋敷も、そういうやはり長屋というのが回りにありまして、その中に本宅というのがございました。

宇野 いま、版籍奉還以後の新しい、お屋敷のお話してございましたが、その中にどういう家令だとか、どういう人々がいたか、そういうことをちょっとお話を承りたいのですが。

井伊 その麴町の本宅というのは、いわゆる昔の大名の屋敷とは全然形態が違いましたが、しかし大雑把に言いますと、昔のやはり大名屋敷のような様式を採っていて、門も非常に立派な門で、私ども子供時に、よく東京見物に来たお上りさんが、人力車を連ねて靖国神社にお参りして、皇居の方へ行くという時に、私の家の前を通ります。人力車の車夫が説明するのに、間違えて、これが桜田門ですと言って、みんながああそうかって聞いてたのをよく覚えておりますが、桜田門

と間違えられるような形式の大きな門でありました。

門を入りますと、やはり家は「表」という部分と「奥」という部分、昔の大名屋敷のように「表」と「奥」という部分がありまして、「表」というのは大きな書院、広間がありまして、玄関を入れて広間があるような所で、それからまたいろいろ事務をやってくださる人を家職と言いまして、職員の方が勤めている部屋だとか、昔侍が勤めておったようにそういう方が勤めておる部屋がありまして、その範囲は、全部書生さんが、玄関番を兼ねて、書生さんが兩戸の開け閉めから何から全部やり、要するに女はほとんどそこへは入らないで、それは男が守備をしている範囲でありました。

そこから奥へ入りますと、「奥」という範囲になり、それは主人の部屋だとか、あるいはお客間だとか、そういういろんな、あるいは子供部屋だとか、それからお手伝いさんの部屋、そういうのがあります。またその奥に今度は局と申して、お手伝いさん達が寝泊りする部屋があると、そういう形態は昔の大名屋敷と同じような形態をしておりました。

宇野 それでは、その家職の方々は、やはり彦根藩士出身だったのですか。

井伊 その家職という方々は、普通の家庭と違って、私の父みたいないわゆる殿様育ちの者は、家のことなんか何にもやらないのです。ですから例えばお客さんが見えた時の応対だとか、そういうことをやったり、それからまたいろんな銀行へ預金に行ったり、払い出しを

したり、それからまた税金を納めたりとか、そういういろんな家としての事務がございますね。そういうようなことを受け持ってやってくださるスタッフが五、六人おられました。そういう方が毎日一人ずつ交替で宿直をしておられました。

その奥に今度は、「奥」という範囲はお客さんを通す部屋だとか、一番奥には主人が住む部屋がありまして、そこへ行く途中辺りに、昔隠居しておった人が住んでいた部屋があり、そういう部屋がもう隠居の方が亡くなった後なんか、子供部屋ということになり、我々子供はそこに住んでいたようなことです。

家職という方は、旧藩の侍だった人の子孫の人ばかりですが、五、六人おられましたし、その下に書生さんというのが、やはり彦根出身で、勉強の為に東京へ出てきているような人達が、二人組ぐらい交替で寝泊まりしてまして、それからその他に、門番の方が一人おられましたし、それから用務員の方が住んでおられる所もあったり、そういう男のスタッフとしては、一〇人近くおられたわけです。

「奥」の方としましては、台所、料理やなんかをやってくださるお手伝いさんが常時三人ぐらいおりましたし、その他「御三の間」というのが、昔の大名の屋敷には必ずあるのですが、「御三の間」というお手伝いさんは、主人のお客さんにお茶を出したり、主人や家族の着物を縫ったり、そういういろんなお手伝いをやってくださる方が四、五人おりまして、その一番上に老女という人が一人いて、老女は特別に一部屋持っております、老女を世話するお手伝いさんもいたわけ

です。

それから父の身の回りを世話するお手伝いさんが二、三人おりまして、それから私どもは兄弟二人なのですが、兄弟二人に一人ずつやはりお手伝いさんが付いていてくれました。そういうので一〇人ぐらい、一二、三人ですか、お手伝いさんが常時おられました。

そのお手伝いさんも、みな格がありまして、老女っていうのはお婆さんですが、いわゆる切下髪というのですが、そのような髪をしていまして、その他のお手伝いさんは、二〇歳以上の人はみな、必ず丸髷を結っております。また二〇歳以下の若いお手伝いさんは、決まって桃割れというのを結っている。そのような規則になっていて、毎朝起きると、みんなお互いに手伝いながらそういう髪を結って、勤務していたわけです。

井伊家の格式と水戸藩

宇野 井伊さんはそういうお話の家庭でずっとお過ごしになったのですが、幼い頃から青年時代に至るまでの、いろいろの思い出を承りたいと思うのですが。それを区分けいたしましたして、まず最初に井伊伯爵家の格式とか日常生活、ご尊父はどういうような生活をしておられたか、お話しを願いたいと思います。

井伊 昔の大名の子孫というのは、全部、公・侯・伯・子・男という爵位を、それぞれによってもらいまして、その一番上の「おおやけ」の公という字を書く公爵は、お公家さんの非常に上の方の方で、鷹司

さんとか九条さんとか近衛さんとか、そういう方が公爵で、その下のお公家さんは「そろろう侯爵」と言っていて、「そろろう」に似た侯爵。それからだんだん、格が下がってくるに従って伯爵、子爵、男爵というのをもらったわけです。大名も、大名は大きな公爵、それからだんだん石高が下がるに従って、侯・伯・子・男というふうに爵位をももらったわけです。

私のところは、井伊家は三五万石ですから、石高から申しますと、当然「おおやけ」の公の公爵をもらうはずだったのですが、皆さんご承知のように、桜田門の事変が起こりまして、井伊直弼が明治の政府から申しますと、国賊だというふうな扱いを受けたようになっていくものですから、格が下げられて、三五万石だけれども、伯爵というのをもらったわけでありまして。

会津の松平も、これは二五万石で、少なくとも「そろろう侯爵」ぐらいはもらはずになっていたが、これも明治政府に敵対したという理由で、格を下げられて、子爵になった。そのような待遇を受けたわけですが、戦後から全部そのようなものが無くなって庶民になってしまいました。戦争が終わるまでは、そういう爵位をもらった者を華族と申して、華族は政府から非常に優遇されていたわけです。

宇野 それで、今ちょっと思い付いたのですが、今大河ドラマでやっておりますが、井伊直弼とそれから水戸斉昭が非常に仲が悪いということですが、この前もちょっと井伊さんから承ったのですが、それより前から彦根藩と水戸藩は仲が悪かったのか、そのことをちょっと

……。

井伊 彦根藩と水戸藩というのは、要するに幕末の時に、水戸斉昭は極端な攘夷論者で、絶対的に攘夷、攘夷と言っていて頑張ったわけですが、ところが井伊直弼は大老という幕府の最高責任者として、攘夷なんてとてもやっていられない。どうしても開国すべきだということで、開国に踏み切ったわけです。そのようなことで彦根藩と水戸藩は、もう攘夷と開国というように、徹底的に仲が悪くなったわけです。

けれどもそれは、その時になって初めて仲が悪くなったわけじゃなくて、非常に不思議な縁がありまして、彦根藩というのは……まず水戸藩というのは、徳川御三家の尾張、紀州、水戸の御三家の一つですが、どういうわけか、尾張、紀州はみな五〇万石以上もっていたのですが、水戸藩だけなんか冷遇されて、三二万石なのです。それで御三家であるにもかかわらず、家臣である井伊よりも、井伊家は三五万石でしたから、家臣の井伊よりも自分の方が石高が少ないというので、それで非常に憤慨しまして、常に仲が悪かったわけです。

そこへもってきて、火に油を注ぐようなことが起こりましたのは、どういうわけですか、幕府の政策として、利根川という関東を流れている川があり、あの川の水利権というのですか、要するに川を監督する権利が彦根藩に与えられていたのです。ですから彦根藩は利根川を警備しなくてはならない義務があったものですから、渡し場渡し場に彦根藩の侍が詰めておりまして、川を渡って江戸の方へ渡ってきた者を、いちいち検問したわけです。

水戸藩の侍というのは、江戸に来ようと思うと、全部利根川を渡ってこなくてはならないわけです。渡ってくると彦根藩の侍が検問するものですから、そこでいざこざが起りまして、絶えず彦根藩の侍と水戸藩の侍というのは、お互いに敵視しているような、そういう関係にあったわけなのです。何も幕末に井伊直弼と水戸斉昭との間で、初めて意見が食い違って対立したというのではないので、それよりもずっと前から、彦根藩と水戸藩というのは、とにかく仲の悪くなる運命に置かれていたわけです。

学習院時代

宇野 いや、どうもちょっと横道へ外れて、面白いお話でした。ありがとうございました。では井伊さんが学習院時代、初等科から高等科までお過ごしだったその頃のいろいろの東京の思い出とか、そういうものを交えながら、お話を承りたいのですが。

井伊 私どもは小学校へ入ります時に、学習院というのに入りました、当時は、学習院というのは宮内省(いまの宮内庁)……普通の学校は全部文部省の管轄下でしたが、学習院だけは宮内省の管轄にありまして、そこへ入る生徒は皇族の子弟か、あるいは華族の子弟というのが原則になっておりました。そのようなことで皇族とか華族の子弟は全部学習院に入ることになって、私も小学校の一年の時から学習院へ通うことになりました。

学習院の子供というのは、小学校の時から海軍……学習院というの

はだいたいが海軍の教育を真似てやっておったわけで、全部海軍式でありましたので、制服もスボンだけは半ズボンでしたが、海軍の将校と同じような制服を着て学校へ行ったわけです。普通の小学校へ通っていた子供達は、その当時はみな、ほとんど洋服を着ている子供というのはありません。男の子も女の子もみな和服、下駄履きで、かばんをこういうふうな肩から掛けて行っておりました。私どもは洋服、軍人のような制服を着て、ランドセルを背負って学校へ通っておりました。

その当時の東京というのを紹介しますと、道路も、今は舗装道路の無い所なんか、ほとんど無いと思いますが、あの当時は銀座通りとかそういう大きな通りでも、市電がいっぱい走っておりまして、どこへ行くのにも市電で行くようになっておりました。市電のレールの所には御影石が全部しいてありまして、歩道も石がしいてありました。

ところが自動車を通る車道という所は、銀座通りみたいな所でさえもみな地道でして、舗装してなかったのです。ですから雨の日なんかはもう長靴でも履いて歩かないと、泥んこになってしまう。それから当時は、非常にお金持ちの方なんかは、たまに自家用車を持って、乗り回しておられる方もありましたが、タクシーなどはほとんど無かったです。どこかへ自動車で、どうしても行かなくちゃならないということが起こった時には、自動車屋というのがありまして、そこへ電話をかけて呼ぶと、タクシーみたいな車が迎えに来てくれて、それに乗って行くというような具合でした。

まして自動車なんかはほとんど走っておりませんし、従ってバスなんかはまだ全くありませんでした。どこかへ行く時には全部市電を利用していたわけです。トラックなんかも全然ありませんでした。その当時はみな馬車、馬力と言いましたが、馬が荷車を引いて、それに荷物を載せて、人がその馬の轡のところを持って歩いていく。そういうのが絶えず道を通っております。私、私もよく歩道を歩いておつても、すぐその横の車道のところを、馬力というのがよく通っていきました。

その馬力の横を通りますと、よく馬が立ったままだーっと、凄いで小便をするわけです。うっかりその横を通ると、だーっとそれに掛けられて、びっくりすることがありましたし、それからまた車道はもう馬の糞だらけでした。その後、関東大震災の後になって、馬力というのがだんだん無くなって、馬は牛に変わりました。

私ども関東大震災で麹町の屋敷が焼けたので、今度はかつて下屋敷のあった新宿の方へ越して、甲州街道という街道のそばに住んでおりました。甲州街道はもう毎晩、夜中中、東京の郊外の阿佐ヶ谷とか杉並の方の農家の人が、野菜を積んで築地の市場まで、夜通しかけて運んでおりましたので、夜中でも荷車が、絶えず通っているというような、そういう状況でありました。

宇野 それで、学習院時代の話にもどしますが、思い出を書かれました書物の中に出てくる、高橋さんという家庭教師をしておられた方、私も若い時に高橋さんには再々お目にかかりました。その高橋さんのことが『わが感懐』の中に出てまいりますので、その中に、悪いこと

をすると何とかかんとか書いてありましたが、その子供の時分の悪さのことについてひとつお話を。

井伊 皆さんは想像がつかないと思いますが、華族という家の家庭では、私どもの母は正室ではなくて側室だったので、父と母は、一番奥の部屋に父の部屋がありまして、そこに住んでおり、私どもはその横の方に子供部屋というのがありまして、そこに住んでおつて、父や母と一緒に寝起きたことは、生まれてから一度も無いのです。生まれると同時に乳母というのは預けられて、乳母という人のお乳をもらって育ち、その後はお付きの女中という人が付いてくれました、その人達の世話になります。

ですから朝起きてまず、父の所へ挨拶に行きます。挨拶に行くと、父の部屋の敷居の手前に正座して、そこで「ごきげんよう」と言つて挨拶するわけです。挨拶は、皆さん、普通でしたらみんな「おはよう」「おやすみ」というような挨拶をするわけですが、華族の世界では、目上の人に向かっては「おはよう」も「おやすみなさい」も何も無いので、全部「いらっしゃい」とか「さよなら」も何もかも全部「ごきげんよう」という言葉で済ますわけです。

今度は目上の方が下の、例えば私どもが「ごきげんよう」と言いますと、上の者は「おはよう」というふうな、普通に答えてくれるのですが、私の父なんかはもう面倒臭がりやでしたから、敷居のところまで正座して「ごきげんよう」と言つて頭を下げますと、「うん」って言うてくれただけで、それで何にも、それ以上私どもには構ってくれない

わけです。

ですからもう父や母と一緒に食事をしたことなんか全然ありません。子供は子供だけで食事をしたわけですから、そういう生活で、それが当たり前だと思っておったものですから、全然そういうことに対して、父や母と一緒に食事をしたというようなことを考えたこともなかったわけで、そういうものだと思っておったわけですから。

宇野 それでは、何か悪戯をする……。

井伊 ああ、そうそう。それでですね、私どもが小学校へ入る頃になりますと、それから先は、今度は、私どもに家庭教師の方を父が付けてくれました。その方は家庭教師と言いましても、普通のただ勉強を教えてくださる家庭教師というのではなくて、朝起きてから夜寝るまで、むろん生活のことについても、絶えずそばに付いて、指導して下さる方が、家職の中に一人決められたわけですから。その方が、今宇野先生のお話の高橋という先生でした。その方が、私どもの父の代わりに、私どもの躰、教育全部をやってくださいましたわけです。

ところが、私どもやっぱ子供ですから、盛んにいたずらをします。それでいたずらしたりなんかして、父の機嫌に触ることをいたしますと、私どもの父は直接私どもを呼んで叱るということは全く無かったわけです。決して直接叱るということは無く、必ずその高橋という家庭教師の方に注意を与えるわけです。そして高橋先生から私どもは、何かいたずらするとすぐ叱られたのです。

ところが、それだけに留まらないで、高橋先生から叱られても直ら

ないようなことが起こりますと、父はその当時、彦根藩の藩士の孫の方で、日露戦争の時に、旅順の二〇三高地の戦いというのがありました。その時非常に戦功を称えられ、その後陸軍大将になられた中村覚という陸軍大将の方がおられたのです。その方が井伊家の相談役の一人をしておられたので、父はその方に必ず手紙を送って、子供達がこういうことと言うことを聞かないので、あなたから叱ってくださいという手紙を書きたいのです。

そうしますと、私どもは中村大将に呼びつけられまして、麴町の家からわざわざ新宿の先の柏木に住んでおられた、中村大将の家へ家庭教師の高橋さんに連れられて出掛けて行きました。行きますと、中村大将が座敷にどんと正座しておられるのです。その前へ正座させられます。そこには必ず論語が置いてありまして、お前らこれを読んでみるって言われまして、読みますと、「身体髪膚これを父母に受く。敢えて毀損せざるは孝の始めなり」というそういう章がありますね。そういうところを、大きな声を出して読まされるわけです。

読み終わりますと、おもむろに中村大将が、お前らこういうことしているじゃないかと。父上の言われることちっとも聞いていない。けしからんじゃないかと。これから絶対そういうことしちゃいけないって言うふうに徹底的に叱られるわけです。もう平身低頭してそれで帰って来るといふような、そういうことをやっております。

(注) 井伊さんの談話中に、いつも「私ども」と複数になっているのは兄、直愛氏を加えての呼称からです。

宇野 それで、中村大将とか、いろいろ彦根藩出身のそのような世に知られた方々は、なにか以前から承っておりますと、井伊家の方で、奨学制度とか何かお作りになっておられたとか。

井伊 そうですね。明治の初年に、幕藩体制が崩れて、侍というのが全部普通の庶民になってしまったわけです。その時に、やはり新しい外国の知識をたくさん吸収しなくてはいけないということで、全国の各藩から優秀な人材を募りまして、それをアメリカやヨーロッパに派遣したわけです。留学させたわけです。彦根藩からも、そういうの何人か行かれました。そういう方達の大部分というのは、上級武士の子孫ではなくて、みなだいたい彦根で言いますと、足軽とって、一番下級武士の、そういう家庭に育った子供の中で、非常に頭のいい秀才がたくさんおりまして、そういう人達を抜擢しまして外国に留学させたわけです。

そういう方が帰って来られて、日本でいろんなことをやられて、法律家であったり、あるいは実業家になったり、あるいは役人になったり、あるいは軍人になったり、みなそういう秀才ばかりですから、みんな成功されて、非常に立派な方達がたくさん輩出されたわけです。

宇野 学習院時代に若殿として、いろいろの役割を負担されたそうですが、例えば御尊父に代わって、菩提寺の豪徳寺へ代参されるとか、そういう話を……。

井伊 私どもは小学校に行ってたばかりの子供なのですが、私の父というのは非常な変人で、ひとつには桜田門の事変があって、井伊直

弼の孫にあたるものですから、明治の時代というのは、井伊直弼というのは国賊だというふうに言われて、非常に叩かれたわけです。ですから私どもの父は学習院にやはり行きましたが、みなから、ああ、あいつは国賊の孫だということなことで、どっちかと言うといじめられたんじゃないかと思うのです。そのような関係もあって、世の中へ出て働くことも非常に嫌いまして、一生自分は職に就かないって。その当時華族は、わりにお金もたくさんあって裕福でしたから、遊んで暮しても別に、就職して働かなくても良かったような時代でしたから、自分は世の中へ出て働くのが嫌だと言って、若い時から能を一生懸命やりまして、一生を過ごした変人だったわけです。そんなことで……。

宇野 それで、御尊父に代わっていろいろ役をおやりになって。

井伊 そうです。父は世間嫌いになってしまったものですから、自分の好きなこと、例えば能を見に行く以外には、絶対外出しなかったのです。ですから例えば親類付き合いたとか、あるいは宮中へ参内したりしなくてはならないことがありますも、たいていのことを全部病氣と称して失礼するというような、そういう性格だったわけです。ですから、正月やなかに、親類へ、おめでとうございますって挨拶に、本当は回らなくてはならない。親類もやって来ますが、それを、子供である我々兄弟に、お前らが代わりに行ってこいって言うんで、いつも行かされることになったわけです。

東京のいろんな街中、例えば文京区の水道橋の辺に、親類の松平とというのがおりますし、それからまた新宿の方には、分家の井伊という

のがいたりします。そういうところへ挨拶に行ったり、それからまた何か法事があるということになると、東京の世田谷に豪徳寺という菩提寺がありますが、そこへお参りに行かなくちゃならない。

それ全部お前ら行ってこいということになりますと、父が私どもに馬車を雇ってくれるのです。あの当時自動車は珍しい時代でしたからね。そうすると二頭立ての馬車、いま、皇太子やなんかが乗ってパレードされる馬車がありますね。あれに似たような、ああいう馬車が来まして、私どもそれに乗りますと、うちの用務員さん達が二人ぐらい馬車の後ろに飛び乗って、ついてきまして、交差点みたいな所へ来ますと、馬車から飛び降りて、馬の轡の所を持って、右に曲がる時には右へ回ったり、左に曲がる時には左に回るっていうように、曲がってしまつと、また元の馬車のうしろ台の上に乗ってる、そういうような馬車で、東京の町を回ったわけです。

私ども文京区水道橋の、後樂園球場のそばに、讃岐高松の松平、あれが私どもの親類で、貴族院議長を長くやっておりました松平頼寿という人がおりましたが、その人が父といとこにあたるものですから、何かという父が相談に乗っていたいていた方なんで、その人の所にまず行かなくてはならない。そこへ参りますと、直弼の娘で松平家へ嫁いで行ったお婆さんがおまして、そのお婆さんにご挨拶しなくてはならないわけです。

行きますと、その時分でも非常に珍しかったのですが、松平の家はやはり大きな門がある屋敷でしたが、門を馬車で入ります時に、門の

とこに、「ちょんまげ」を結った門番の人がいて、その人は何て言うんですか、もう土下座をして、私らの馬車を迎えてくれて、そういうような状況でした。

私どもが松平の家に行つて、頼寿ご夫妻、それからお婆さんに新年のご挨拶を申し上げます。そしていろんな雑談に入りますと、子供のことでですから、先方からあなた方食べ物何が好きですか？と云つて、ご飯のおかずなんか何が好きだと聞かれたりします。私どもは全然お構いなしに、さんが好きですとか、あるいは油揚げを焼いたのが好きですとか言います。帰ってきてから付いてきていた家庭教師の人に、あなた方は、もっと上品な話をしなくてはいけません。油揚げを焼いたのが好きだとかそんなこと言うのはまずいと言って叱られたのです。例えば鯛が好きだとかなんとか、そういうのが好きでなくてはいけないというんです。しかし、私ら子供は正直ですから、嫌いな物は嫌いだつて言うように、好きな物は好き、だから毎朝、例えば食事なんかでも、華族と言うと非常に贅沢なものばかり食べてるように、一般の方は思つておられたと思います、食事なんかはいたつて質素なもので、朝は、味噌汁とご飯と油揚げの焼いたのが二枚ぐらいある、その程度のご飯。そういうのを食べていたわけです。ですから正直にそういうことを申しますと、華族の息子がそんなもの食べてるなんて言つてはまずいって言つて、叱られたりしたものです。

井伊家文化財と関東大震災

宇野 ありがとうございました。では、井伊家というのは、非常に美術品をたくさん持っておられるというので、有名な大名家だったのですが、例えば井伊家と言えば彦根屏風。また幕末から維新にかけての、膨大な井伊家文書なんかがあり、彦根屏風は国宝、井伊家文書は重要文化財になっているのですが、関東大震災の時にこれらが、どのようにして持ち出されたか。特に彦根屏風などは我々は関東大震災で焼けたのではないかと思っていたのですが、それがあの大きな災害の中で、切り抜けてきた、そのことについて一言お話を願いたいのですが。

井伊 私どもは、麴町の屋敷で暮らしてきたのですが、大正一二年、あの時は私はちょうど小学校の初等科を卒業して、中学の中等科一年に入ったばかりの夏だったわけです。その時、私どもは大きな屋敷の広間に、卓球台を持ち出しまして、書生さん達と一緒に卓球のことをピンポンと言っていました。卓球を、書生さん達と一生懸命やっていたのです。やっていましたところが、昼になって、もうじき昼飯だなんて思っている時に、急にゴーと凄い音がしてきて、なんだかおかしな雰囲気になってきたので、みなで卓球の手を止めて、おっ？変だなんて言っていましたところ、突然地震がやってきて、だーっと凄い揺れになってきたわけです。

ちょうどその日の朝、台風が来まして、台風をよける為に雨戸が閉めてあって、そのうちの一部の雨戸が半分ほど開けてすかしてあった。

その雨戸の隙間から大急ぎで庭へ飛び出しました。庭には池があつて池の向こうに芝生があり、そこまで走ったのですが、足がもつれて走れません。池には底の方に水が貯まっているだけでしたが、それが洗面器をたおしたように、だーっと全部池の水が外へ飛び出して、私も家から飛び出して五、六歩行った時、どーっと凄い音がしたので、なんだろうと思つて振り返つてみると、広間の大きな屋根の瓦が、ざーっと全部落つこつてしましまして、一歩出るのが遅ければ、その瓦に当たつて大ケガをしたのじゃないかと思うのです。

千鳥足でようやく庭の真ん中の芝生のところへ行つて、小さな松の木にすがつたのです。ところがすがつてもねじ倒されまして、寝そべつてすがつていなきやいられない状況でした。地面がぐるぐるぐる、芝生がべりべりべりべりっていつてごーっと盛り上がつてきて、私ども、子供心に、あっ、これはなんか地球が割れるんじゃないかなと思つたぐらい、凄い揺れになりました。

その時に一番驚いたのは、庭木に止まっていたスズメだとかカラスなんか、木が揺れるものですから、大慌てで全部飛び立ったわけです。ところが飛び立った鳥が、全部墜落してしまうのです、地面に。そういう光景を見まして、ははー、これは地面はしっかりじゃない、空気も物凄く揺れているのだなということが初めて分かったのです。ああいふ大地震になりますと、地面だけじゃなく、とにかく空気も一緒に揺れているらしいです。そういう経験を初めていたしました。

その後火災が起こつて、東京の下町の方はもう全部火の海になった

のですが、私どもの家はその火とは関係無かったが、私どもの家の西の方に、東郷元帥のお屋敷があって、そのお屋敷のすぐそばから出火しまして、その火が、消防車が来ても、地震で水が出ないわけですから消防車はただ、うろろろするだけであって、水を蒔くことも何もできないわけです。

夕方六時頃になって、もう私どもこうやっても危ないから逃げようということになって、一家、家職の方やそのほかの人々全部合わせますと、五〇人ぐらいになったわけですが、女子供達全部集めまして、握り飯を作って、家を出て退避したのですが、その時に皇居の方へ向かって行き、半蔵門の近くにイギリス大使館がありました、その近くが安全だと思って向かって行ったのですが、火の粉がどンドン落ちてくるわけです。火の粉が落ちて熱いので、女の方なんか日傘みたいな物さして、火の粉をよけて歩いてますと、あっとい間に日傘がぱーっと、火の粉で燃えてしまうんです。そういうような中をやっとの思いで逃げたわけです。

当時井伊家には、大小合わせて二階建ての大きな土蔵が八つぐらいありまして、そこに文化財がいっぱい入っておりましたが、その土蔵も、子どもが庭へ出ております時に、ドーンと凄い大きな音がして、はっと見ましたら、その並んでいる土蔵の壁が、一遍に全部だーっと崩れ落ちてしまいました。なんか土煙でナイアガラの滝を見ているような感じがするくらい凄い勢いで全部落ちて、土蔵が裸になってしまったわけです。

ところが私ども退避する時になって、その土蔵の中の大事な物だけでも出したいと思ったのですが、とても出す余裕がありません。それでも家職の方達が、一番大事にしてみました彦根屏風と、それから家康からもらった茶入れと、井伊直弼関係のもの、また彦根藩の歴史的資料、文書が五、六箱シナ鞆みたいなものに入っていた。それだけをやっと持ち出しまして、大八車に積んで逃げたわけです。

これらのものはそれで助かったのですが、私の所は明治の初め、他の大名と同様に、全部東京に任せという政府の命令で、彦根から東京へ本居を移したわけで、さらに私の父が、彦根の屋敷にあった大事な文化財みたいなものを、彦根へ帰るごとに見て、これは東京へ持ってゆけ、これは東京へと言うんで、ほとんど大事な物は全部東京に集めて、東京の蔵に入っておったので、それが全部焼けてしまいました、今でも残っておりますが、刀が一二〇〇本ぐらい、みんな名刀だと思えますが、みなぐにやぐにやに、赤錆になって残っております。

それから湖東焼きという彦根の藩窯で、非常に名品がたくさんあったのですが、そういうのが全部、釉薬が全部溶けてくっついて、塊みたいなになり、屏風も、子ども子供の時は土蔵へはほとんど入れてもらえなかったもので、見たことないのですが、屏風だけでも一〇〇双ぐらいあったと言われていましたが、とにかく紙の物は全部跡形無しに、灰になってしまいました。今、彦根城博物館に、井伊家の文化財を展示しておりますが、これは彦根に残していた物だけが残って、それを展示しているの、井伊家が持っていた文化財の八割五分は関東大震

災で焼いてしまいました。残念なことをしたと思っております。

井伊家コレクションの特色

宇野 承りますところによると、彦根屏風は大八車に載せて、濡れむしろをかぶせて、代々木のお屋敷まで運ばれたそうですね。私、彦根屏風で非常に思い出がかりまして、彦根屏風は戦後先ず重要文化財に指定されたのですが、その時に私は、文化財の仕事を担当しております、文化庁の鈴木さんという技官と私が、井伊家の了解を得ずして重要文化財に指定したので、井伊家に謝りに行けという話になり、えらい貧乏くじを引いたなと思って、私も鈴木さんと、何と言って頭下げたらいいんだろうなと思って井伊家を訪れたのですが、井伊さんにお目にかかりましたところ、「いいですよ」というような了解を得まして、ちょうどうちにあるから、お前達見たらどうだっって見せてもらって、これで非常に勢い付きまして、次の会議に、国宝にすることになっているからと初めて切り出したところが、もう重要文化財になったんだから、国宝であろうと構いませんよとの返事をいただき、やれやれと思って大役から逃れたと思った。そんな思い出が強く残っております。その節には非常にお世話になりましたありがとうございます。

それからもう一つ井伊家には、非常に重要なものがありました、これは日本の宸翰の中で一番古い、嵯峨天皇の宸翰があったのです。これは今延暦寺にあるのですが、延暦寺の光定という僧が戒を受けた時、

嵯峨天皇が自らその牒を書かれた宸翰なのです。それが織田信長の焼き討ちの時に延暦寺から外へ出まして、それが井伊家に伝わったわけなのです。それを井伊家が比叡山の方へ寄進されたわけです。そんなことで今国宝になって、延暦寺にあります。

そういうように井伊家というのは、非常に名品を持った大名であったのですが、この際に井伊家伝来の美術品というものについて、その特質を、井伊家の方というだけじゃなくて、彦根城博物館の館長としての立場から、両面から、井伊家の美術品の特色をお話し願いたいのですが。

井伊 いま、井伊家にあった文化財は全部彦根市に兄（元彦根市長井伊直愛氏）が寄附いたしました、彦根市の所有になり、彦根市立の彦根城博物館に収蔵されています。その特徴を申しますと、大名道具の博物館なのですが、大名道具は、現在では、皆さん御承知の、名古屋に徳川美術館というのがあります、これは尾張の徳川家に伝来した、いろんな美術品を展示しておられるもの。これが日本で一番格が高い、大名道具の展示館だと思えます。彦根城博物館は、それに次ぐものじゃないかと思っております。

大名道具と申しても、いろんな物があります、何と言っても一番主な物は武器です。鎧、兜、それから刀剣、馬具というのがたくさんあります。鎧は全部井伊の「赤備え」と申しまして、これは彦根藩が徳川家康の命令で、武田を攻めた時に、徳川家康が武田軍にてこずったのです。その時に武田の部隊の中に凄い強い部隊があって、それが

真っ赤な具足を着て、真っ赤な旗を持って、そういうのに家康はさんざんてこずらされたわけです。それで、家康は自分の部隊の中にもそういうのを作ろうというので、井伊直政に、お前のとこ全部赤備えにしろと言われたので、私のところに残っています具足は、他の藩はみな黒とか紺とかですが、井伊家の具足だけは全部赤い色をしておりません。

それから、刀剣は、先ほどもお話ししましたように、関東大震災で三〇〇本ぐらい焼いてしまいました。その後今度は終戦の時に、進駐軍がやって来まして、全部出せということになりました。しかも二四時間以内にとりようなことで、全部装具を外したりなんかするところまでなくて、槍や薙刀は、柄から先をのこぎりで切って、先だけを出したりしました。ところがその槍・薙刀というのは、どういうわけか一本も返してくれませんでした。全部取り上げられて一本も残ってはいません。刀だけは、これはいい刀だから、お前のところの自家保存にしないでと言われまして、三〇〇本ほど出したうち七、八〇本返ってきました。それが現在残っているものです。

ところで井伊家の刀の特徴を申しますと、他の大名家にも立派な刀がたくさんありますが、井伊家の刀は、刀それ自身もですが、「こしらえ」が、「こしらえ」と申しますと柄とか鞘、それが非常にたくさん残っているのです。大名というのは、普通の侍は必ず黒い大小を差して、大名も江戸城へ行く時には、黒い鞘で、黒い装備で行ったのですが、普段は普段差しと言って、非常にカラフルな鞘のこしらえ

を差していたわけです。ですから一本の中身に対して、「こしらえ」というのは二組も三組もあるものがあります。それでその「こしらえ」が非常に豊富に残っているというので、文化庁も目をそれに付けておりまして、それを一括して、重要文化財に指定したらどうかという話が始まっているようです。

それから馬具が非常にたくさんあります。馬の鞍・鐙がたくさん残っております。これは何故かと申しますと、特定の大名というのは、將軍が例えば日光へ参拝する時に、そのお供をして行ったり、あるいは將軍の代わりに彦根藩なんか代わりに、代理として日光へ参拝したり、それから將軍の後継ぎが元服の時に冠を被りますが、その冠を被せる役をしたり、そういう役が回ってくるわけです。そういうことをやりますと、御苦労だったと言うので、將軍から必ず、馬を拝領するので、馬を拝領すると全部馬具が、鞍から鐙から全部装備が付いた馬を拝領するわけです。ですから拝領の鞍のストックがたくさん出てきて、拝領した鞍なんかを勝手に人にあげたり、売ったりなんかすることができないわけですから、大事に拝領品として取っておく。それがどんなにたまってきて、たくさんになっております。

それと同時に、今度はそういうものを拝領しますと、必ずこっちらも將軍家へ今度はお礼を献上しなくてはいけません。お礼に献上する物、何を献上するかというと、また拝領したのと同じに馬を献上するのです。その時には、鞍やなんか全部装備が付いたのを献上しなくてはいけないわけなのです。だからそういうことが起こることを考

えて、普段からこちらとしても立派な、綺麗な鞍を、用意して持つていなくてはならないのです。だから拝領した鞍と献上しなくてはならない鞍という、そういうものがストックされて、鞍だけでも、凄く数が残っているわけです。

そういうのが特徴でありますし、それから茶器です。茶器は、茶道というのは大名の一つの教養の心得として、江戸初期から大名は必ず茶道をやっていたわけです。井伊家は将軍家と同じ石州流というのをやっております、その茶道具がたくさんたまってあります。特に井伊直弼は茶が非常に好きでして、子供の時から茶道の勉強をしまして、いろんな茶道の本を書いております。歴史の上ではあまり知られておられないかと思いますが、直弼は幕末の茶人として有名な、松江の松平不昧公をしのぐ江戸末期の茶人ということになっております、やがていろいろ直弼が書いた茶の本も出版されることになると思いますが直弼は茶人でもありました。

幕末には侍ばかりでなくて、町人の間にも広がって盛んになっておりましたが、町人の裕福な人は、茶をやると言って、例えば棗だとか茶入とかそういうのを、非常に高価な名品を、高いお金を出して買を入れてきまして、それをお互いにお茶席に出して自慢するというような、そういう茶道になっていたわけです。直弼はそういうのを世間茶と言いまして、非常に嫌い、禅の精神で、道具なんか何でもいい、自分が作ったものでいいと、自分がたくさん作り、自作の茶道具というものがたくさん現存しています。

それからもう一つは、能の衣裳と能面がたくさんあります。これは、大名というのはみな能をやったものですから、大名屋敷というのには、必ず、少なくとも上屋敷、井伊家みたいな所になりますと、中屋敷や下屋敷にも必ず家の中に能舞台がありまして、お抱えの能役者というのがいて、能を盛んにやっていたわけです。ところが、私の父は自分自身が能が好きで、能を一生懸命やっていたわけですから、その為にたくさん能衣裳を買い集めて、能面も買い集めました。

細川家とか前田家とかそういう所に行きますと、必ずその博物館に能の衣裳や面が出ておりますが、これは、そういう大名の能の衣裳というのは、能のうちの主役、シテ方と申しますが、シテ方が着る衣裳しかない。殿様はシテ方しかやらない。脇役なんてことはやらないわけですから、シテ方が着る衣裳しか残っていないのです。脇やなんかの無いのです。

ところが井伊家は、私の父は、二〇〇舞以上ある能を、全部いつでも即座にできるようにと言うので、ワキ方から、もう極端な話、雛子方の衣裳まで、それから小道具なんかまで全部揃えています。そういうのがあるものですから、他の博物館と違って、そういう能衣裳なんかも非常に種類がたくさんある。能面も二〇〇点以上あります。八〇点ぐらいあれば全部の能ができるのですが、それが二〇〇点以上もあるというのです。

それからもう一つの特徴は、雅楽の楽器が、箏だとか箏だとか、笛だとか琴だとか琵琶というのがたくさんあります。大名というのは、

幕府から雅楽をやってはいけないという定めがあったのです。と言うのは、雅楽は元来宮中でおやりになって、お公家さんがやるものです。だから雅楽なんかやると、お公家さんと仲が良くなるといけないと言うので、お公家さんと仲良くさせない為に、雅楽というのは大名はやってはいけないということになっていました。

ところが、彦根藩だけは特別扱いでして、これは京都守護という役目があったのです。ですから京都守護という役目の関係上、何かと言うと京都行って、御所に参内したりして、お公家さんと付き合わなくてはならないわけです。お公家さんと付き合う為には、どうしても雅楽とか蹴鞠とか、そういうものの素養がなければ付き合えないわけですから、その関係で彦根藩は、雅楽をやってもよろしいということになった。ところが直弼の兄で先代にあたる、一二代藩主の井伊直亮とというのが、これが極端に雅楽が好きだったのです。

それで自分でむろん演奏をしましたし、侍に楽団を作らせて、雅楽の演奏をやらす。そういうことをやっていたので、その関係から雅楽の楽器を集めたわけです。そのコレクションが残っております。かつて雅楽の有名なコレクションは伏見宮家と紀州の徳川家であったのですが、これらは、みな戦後散逸してしまっていて、今日本で唯一の雅楽の楽器のコレクションとして残っているのは、彦根の博物館だけになってしまったわけです。そういうものが井伊家の美術品の特徴であります。

宇野 ありがとうございます。実は今、雅楽の話が出ましたが、

楽器というものについて、研究が非常に遅れているのです。確かに天平時代であるとか、ああいう頃の古い楽器、正倉院にある古い楽器は研究者がいるのですが、それから以後の楽器の研究者がいけないのです。それで冒頭にも申しましたように、文化庁が主催で彦根市が行いました、井伊家の什宝調査の時、一番困ったのが、楽器を担当する研究者だったのです。私は人選に困ってしまっていて、文化庁に担当者の人選の下駄を預けたのですが、文化庁も非常に困りました。結局東京芸大の先生に来てもらったのですが、楽器には漆で表にいろいろと装飾が施しております。そうすると工芸の人が関係しなくてはならない。

もう一つ井伊家の楽器で、非常な特徴は、名物ものの楽器があるということなのです。例えば平敦盛が使ったと称する笛であるとか、それは本当に敦盛が使用した笛であったか否かは別問題としまして、そういう名物ものがある。そうすると名物ものには添え状という文書がくっついているわけで、古文書になってくると、東京芸大の先生は歴史家じゃありませんから、古文書を読む力が弱い。そうするとまた吾々が引っ張り出される。そんなことで一番井伊家の調査の時に苦労したのは、楽器関係だったのです。それだけに、楽器の研究が遅れているということは、それは今井伊さんがおっしゃいましたように、大きなコレクションが日本に無いからなのです。そういうところに私は井伊家の什宝が、非常に大きな意義をもつのではないか、かように思っております。

もう一つ先ほど能面のこと、また能衣裳のことについて、井伊さん

が触れておられましたが、井伊家のこれらの大きな特徴は、すぐ演能に間に合うような体制になっていること。これが非常に大きな特色じゃないかと思うのです。確かに日本にはいろいろな能衣装であるとか、能面がありますが、それは一つの美術品としての収集なのでして、すぐに演能に役立てられるかと言うと、ちょっと問題があるわけです。それが井伊家の物はすぐ演能に役立たせるところの、要するに体制にある能衣装であるとか能面のコレクションである。こういうことが言えるのじゃないかと、私は考えております。

しかし現在、井伊家の物は全て、彦根市に寄贈されまして、彦根城博物館こそは井伊家の伝来品を全部収納するところの博物館であるわけです。膨大な維新史の研究に、欠くことのできない井伊家文書も、これまた彦根城博物館の所管になっておりまして、幕末史の研究には欠くことのできない史料であると、こういうように私は感じとっております。

今回は井伊さんに来ていただきまして、いろいろと我々の耳にすることのできないお話、裏話を、承りました。ちょうどこちらへ参ります道中、井伊さんとお話をしておったのですが、井伊家の非常に大きな位置付けを確立した、井伊直孝は、大阪夏の陣に、東大阪にありまます若江の戦闘で、木村重成と直孝は戦いまして、そこで大阪軍を完全に大敗させたわけです。そういう東大阪と井伊家というのも、非常に深い繋がりがございます。今日帰りに、昔の面影はありませんが、若江の方をちょっとご案内して井伊さんをお送りしようかなと、このよ

うに思っております。

今日は私の聞き出しが非常にまずい点がございまして、十分に井伊さんの大名華族の、書物にもどこにも無い裏話を、十分に私が掘り出すことができなかったことについてお許しを願いたいと思います。これをもちまして、井伊さんのお話を終わらさしていただきたいと思えます。井伊さんどうもいろいろとありがとうございます。

司会 両先生、どうもありがとうございます。それじゃ一応、これで終わらせていただきます。これから後、谷岡記念館、商業史資料室の見学会等もございしますが、ここでひとくくりの締めといたしまして、本学学部長の片山先生から、ご挨拶を申し上げます。

片山隆男学部長 片山でございます。両先生ありがとうございます。いかがでございましたでしょうか。私の貧弱な歴史的な知識からいたしますと、井伊家と申せば、井伊の赤備えということで、武の誉れ高いお家でございますし、幕末井伊直弼という大老を出されたという名家でもございます。今お二人の話を伺っておりますと、両先生のお人柄でしょうか、何かこう馥郁と菊の香がするような、至福のひとときを与えていただいたというふうな思っております。学部長と申しますと、学事に追われまして、あたふた毎日いたしておりますから、今日は本当にゆっくりと聞かせていただきました。皆様もいかがでしたでしょうか。もう一度両先生に、温かいお礼の拍手をしたいと思えます。それでは大阪商業大学、大阪府並びに東大阪、そして八尾、柏原、三市教育委員会の共催によりまして、大阪商業大学公開講座、これ

で終わりたいと思います。長時間にわたりましてご清聴いただきまして、ありがとうございます。

(この対談は、大阪商業大学、大阪府、東大阪市・八尾市・柏原市教育委員会共催の下に平成一〇年一月二二日(土)、大阪商業大学九号館九四一号室において行われた公開講座をもとにしたものである。)